

国際コミュニケーション学部

教授 土屋 昌明

この本の著者は、一九五八年に中国の遼寧省の田舎に生まれ、少年時代にある村で日本人のおばさんに出会って、日本語を教えてもらったそうです。そこでちょっと考えてみてほしい。著者が少年時代というのが十二歳だとすると、彼がそのおばさんに出会ったのは一九七〇年です。そんなときに中国の田舎に日本人のおばさんがなぜいたのでしょうか？ このころ、今と同じように日本人は中国と行き来できたのでしょうか？ 答えはノーです。このころ、日本と中国は国交がなかったのです。だから、このおばさんは仕事でそこにいたのでも、旅行でそこにいたのでもないことになります。そのおばさんは中国（中華人民共和国）ができる前からそこにいたのです。そこが「満州国」とされていたときに、おばさんは日本から満州国に行き、満州国がなくなったあと、日本に帰ってこれず、そこに住み続けるしかなかったのです。なぜそんなことになったのか？ 彼女はどんな気持ちで中国に住んでいたのか？ これらのことを知らなかったら、ぜひ本書を読んでみてください。同じ題のドキュメンタリーもあります。ちなみに、私の母親はこのおばさんと近い所に住んでいました。でも私の母親は日本に帰ってこられたんです。もしこのおばさんみたいに帰ってこられなかったら、私はいま存在していなかったわけで、あなたにこの文章を読んでもらうこともできなかったことになりますね。



班忠義(1992)『曾おばさんの海』朝日新聞社

本 館: /916/H27 107247447
Knowledge Base: J/916/H27 701671570



読書のスルメ2020

